

# 「保育内容（環境）」における 「自然との関わり・生命尊重」に関する講義のあり方

“An infant learns through nature and concerning and Life Respect.”  
the state of the lecture of a teacher education course about a fact

山 崎 正 明  
Masaaki YAMAZAKI

## 1 はじめに

平成29年に告示された「幼稚園教育要領」では「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」とともに「幼稚園教育において育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「育ってほしい姿」とする。）<sup>1)</sup>」として10の姿を明記した。

「保育内容（環境）」の講義でもこのことを踏まえたものにした。「育ってほしい姿」で具体的に関連するのは「(7) 自然との関わり・生命尊重」<sup>1)</sup>である。本稿ではこの「資質・能力」を育む視点から「保育内容（環境）」の講義のあり方を研究した。

## 2 研究の目的

「育ってほしい姿」の中の「(7) 自然との関わり・生命尊重」については「幼稚園教育要領」の中で以下の通り示されている。

「(7) 自然との関わり・生命尊重～自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にす気持ちをもって関わるようになる。」

このことを教員養成の講義の中で学生が将来そのような資質・能力を大切にしたい保育ができるようにするために、本研究に取り組んだ。将来幼稚園教諭となったときに、目の前の子供を見て、教員個々がどのような教育をすべきかを日々考えることになる。その時の大切な視点は幼稚園の教育目標であるが、それとともに、「幼稚園教育要領」がさらに重要な視点になる。「保育内容（環境）」の講義では「教育要領」に示された内容をもとに、それを具体化できる力を育まなければならないと考えた。

---

1) 保育内容「環境」だけで「(7) 自然との関わり・生命尊重」が育まれるわけではない。

### 3 研究の方法

本稿では、北翔大学教育学科の講義「保育内容（環境）」において、「自然との関わり・生命尊重」ことの意義や価値を、学生が深く実感する講義を工夫し、改善することで目的を達成する。

方法としては、講義「保育内容（環境）」について以下の視点を重視した講義をおこない、「学生の振り返り」から講義の妥当性について評価する方法をとった。

- ・「自然との関わり・生命尊重」についてその内容について考える講義
- ・教員になり教育的実践力を身につけることができる講義

### 4 講義「保育内容（環境）」の研究報告

#### (1) 「自然との関わり・生命尊重」意義や価値を感じる講義の実施

「幼稚園教育要領」および「幼稚園教育要領解説」には「保育内容（環境）」で扱うべき内容が示されているが、学生自身がそこに示された内容に意義や価値を感じることで学びがより主体的になると考えられる。講義で学んだ学生が、実際の教育現場で強い意志を持って実践するためには、学生が講義における学びの価値を強く実感することが必要である。

そこで「自然との関わり・生命尊重」についてその重要性を示す根拠として以下の3つのビデオ教材を用いた。「レイチェル・カーソン 感性の森」「イランカラプテ こんにちはアイヌ文化」「わこう村「和光保育園の子どもたち」」である。

#### (ア) 映画「レイチェル・カーソン 感性の森」<sup>2)</sup>

まず、レイチェル・カーソンの次の言葉を中心に扱った。「[「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます。』<sup>3)</sup>

レイチェル・カーソンの言葉と領域「環境」および「育ってほしい姿」の中の「(7) 自然

---

2) DVD「レイチェル・カーソン 感性の森」出演 カイウラニ・リー 監督 クリストファー・マンガー 2012  
アップリンク

3) 「センス・オブ・ワンダー」レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳（1996年）

との関わり・生命尊重」に表現されている言葉の関連を考えられるよう、映画「『レイチェル・カーソン感性の森』」を視聴させた。以下はその講義における学生のふりかえりである。

■学生のふりかえり（ただし抜粋したものは学生本人が書いた文章の一部。）

(A.Y)「確かに知識は大事だが、それ以上に体で風や音を感じることは、それ以上に大切なことを教えてくれるというのは強く納得できるメッセージでした。気持ちや表情も豊かになり、色々なことを考え学ぶことに結ばれていくのではないかと思いました。」

(A.K)「教育は決してすべてが人間から教授されるものではない。自然の中から子供たちが自ら何かを感じ、不思議に思うことが大事。知の出発点の原点である不思議に思う心、それを自然から子供たちが学び、感じ取る。それがもっとも尊い学びなのだと思う。」

(F.M)「自然の中から子供たちが自ら感じて学びとることも大切。だから小さいうちからたくさん外に出させて、自然と触れ合って、自分だけに感じられた面白さを見つけてほしい、それをみんなで共有できたり、新たな発見も子供たちにさせてあげたいと思いました。」

また、これらの感想を発表し合うことを通して以下のような振り返りができた。

(M.Y)「レイチェル・カーソンは必然ではなくて、偶然から「環境」というものに興味を持ち、人生をかけて、その大切さを伝えていった。子供から大人まで、人々が生きていく上でそれだけ「環境」が影響与えるものだという事だ。ペンを持って学ぶことだけでは知識が豊かになっても、人生をより豊かにする感情は豊かにならないだろう。感情を育てるためには、自然の環境に触れることが不可欠だ。虫や植物、川や海…自分の肉眼でそれらを見て、感じて、五感を駆使して「なんだろう?」「素敵だ」「こうしてみよう」など感じ取ることが大切である。それを可能にするのは知識を入れる勉強ではなく、感情を使う勉強であり、それらの両方ともが必要だと考えた。」

(K.A)「他の人の感想を聞いて、他者の意見を取り入れることで、自分の考え方の幅が広がるので、意見を交流したり、紹介しあったりするのは教育活動の中でも大事だなと感じました。特にレイチェル・カーソンの人生について深く考えられている人が多かったと思う。これからどう生きていきたいか、人生を考えていく上でこの題材はとても良いものだと感じた。机に向かって学勉強する学習だけではなく、自然に触れる大切さに気づいていた人もいて自分も将来教員になったら子供たちに自然と触れあったり、体験を通しての学習をさせたいと強く思いました教科では学べないことを教えていきたいと思います。」

学生の言葉からもわかるように、映画の内容は非常に充実したものであるが、講義の時間に対して映画の時間が長いためテキストを読み込む時間と映画に関する意見交流を通じた場の設定の確保が時間的に短くなってしまふ。しかし、講義のねらい通りレイチェル・カーソンの考え方に共感し、この講義を学ぶことに意義を感じたことが学生の文面から読み取れる。

(イ)「イランカラプテ こんにちはアイヌ文化」<sup>4)</sup>

北海道には先住民族としてのアイヌ民族が存在する。アイヌ民族の生き方は自然と関わりから生まれているが、アイヌ民族の自然観を学ぶことは保育における「自然と関わり・生命尊重」を考える上でも非常に示唆に富んだものになっている。現代の生活の中で忘れてしまいがちな大切なことを、示すものと言えよう。このアイヌ民族の文化を紹介しているのが財団法人アイヌ文化執行・研究推進機構が制作した「イランカラプテ こんにちはアイヌ文化」である。このDVDの視聴とあわせて知里幸恵の「アイヌ神謡集」序文<sup>5)</sup>を教材として取り上げた。

## ■学生のふりかえり

(A.T)「アイヌの人たちが狩りをする時やものを作るときはいろいろなものに感謝したり、誰かのためのものを作るなどこういったところは教育に通じるものがあると思いました。アイヌの人の考え方や思想は今の現代社会にとって不足しているものだと思います。これからの教育の中でアイヌ文化を学んでいくことが豊かな心情や、他者を思いやる気持ちを育むことには欠かせないものだと思います。これから教員を目指すにあたり子供の心情育てるためにはアイヌ文化以外にも適した教材もあると思うので関心を持って取り組んでいきたいです。」

(O.Y)「自分たちが使う分だけ自然から素材を取り、その素材にしっかり感謝していたり、自分たちの得のためだけに動かないアイヌの文化に感動した。私たちもこの現代だからこそ、自然を大切にしようとする気持ちを持ち暮らしていく必要があると思う。」

(D.R)「自分たちが生きていくことができるというのは素晴らしい環境のおかげであるということを理解し、生活しているということがわかった。自分たちと関わりのある全てに敬意を持ってこの環境を保つことができるように配慮するアイヌ民族の考えは動物や植物、人や自然を愛し、共に生きる喜びから来ているものであると考えた。知里幸恵さんの文章からは、自然や恵まれた環境を愛し、それらと共に生きる素晴らしさを感じられ、そういった心を持つ民族だからこそ作ることができる文化や習慣、習わしが生まれたのだと思った。」

(イ)わこう村「和光保育園の子どもたち」<sup>6)</sup>

学生が幼児教育を考えるにあたって、幼児の姿に日頃、接していないため、どのような教育をするか、イメージ化が難しい。

そのため幼児が「自然との関わり・生命尊重」に関して描いた映像を見せる必要があると考え、千葉県富津市で四半世紀にわたり自然や地域などの環境を重視した独自の保育理念で運営

4) 財団法人アイヌ文化執行・研究推進機構「イランカラプテ こんにちはアイヌ文化」アイヌ文化普及啓発DVD

5) 知里幸恵編訳「アイヌ神謡集」序文 [http://www.aozora.gr.jp/cards/001529/files/44909\\_29558.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/001529/files/44909_29558.html)

6) 千葉県富津市で四半世紀にわたり自然や地域などの環境を重視した独自の保育理念で運営されている和光保育園を取材した短編ドキュメンタリー。監督は筒井勝彦。雑誌「新 幼児と保育」(2014 6/7)号に添付されている。

されている和光保育園を取材した短編ドキュメンタリー「わこう村～和光保育園の子どもたち」を視聴した。このビデオは、かつて自分が幼児だったころの姿を想起させるような、幼児が感じ、考え、学んでいる姿が克明に描かれている。学生も食い入るようにビデオを見ていた。以下が学生の振り返りである。

■学生のふりかえり

(M.U)「自然と触れ合うと言う事は、子供の成長を大いに促してあろう。現代では、そういった機会は減っているかもしれない。それでも、少なくとも環境与える事は大人の義務であると思う。「海に行ったことがない」「山登りをしたことがない」「包丁は危ないから使わせてもらえない」それは確かに安全だ。怪我もなければ怖い思いもない。

だが大人になっても、ずっと危険から逃れられるわけがない。前述した力を育む以外に「生きる力を育てる」和光学園から学ぶべきことは多い。」

(K.F)「今日のビデオは和光の日常的な普通のビデオだ。すごく惹き込まれるものがあった。その辺の普通の保育園とは全然違ってさまざまな自然に触れることで生きることを実感したり、動物と関わることで、周りの友達や人への気遣いができることなど、その関わり以外のこともたくさん築けて小さい頃からすごく良い経験をしていると思った。家庭だとなかなかできないことや、友達と一緒にだから学びながら楽しむことができていた。」

(M.M)「こんなことまでやるんだと驚くことがたくさんあった。でも小さい頃にあんなに自由に遊ぶことができたなら楽しかっただろうなと思った。また、自由に楽しいだけではなく、飼育も自然と関わることを通して、命の尊さ、生と死について考えていた。今、生きている時間をどう過ごすかが少し変化すると思う。」

三ツ見 椋幸  
DVD  
保育内容 (環境)  
小学校の勉強に比べて、この保育は、10月23日(月)  
その体験で子どもたちの感情が育つということである。  
学生番号 5116129 氏名 \_\_\_\_\_

千葉県富津市  
わこう村「和光保育園の子どもたち」  
汚れてもいいから遊びたい!!  
その環境を事前に連絡  
男性の保育士  
良寛 けん  
↓  
親衆社

「子どもが自由に遊ぶことに  
大人が手伝いをする」  
子どもたちが自由に遊べる  
先生も  
先生も  
先生も

子どもたちが遊ぶところ  
ボールやおもちゃだけでなく、トランポリンやロープなども遊ぶ道具にしているところが、環境と遊びの融合がとれた。

プール作り 無理せず楽しく頑張ろう。おやみの会  
幼稚園の母さん任せにやらせよう。お父さんの知識・経験を子どもたちの遊ぶ環境と。

海、すいか割り  
海にルールを決めず、自由に海と触れ合わせる。  
すいか割り→自然と友だちと応援するようになる。  
おんじと協力して1つのことをやりとげる。

生き物との  
触れ合い  
子どもたちに身近な動物を通して、人を思いやる、自分以外のことも考えることをせよ。自然には、たくさんの生き物がいる。(食べ物も含め)

しゃべり(おしゃべり)  
食に付いて、おみやげやどのようして食べる物ができているかも知ることが出来る。その中から張出したときの達成感。

遊びたい・やってみたい(気持ち) → 恐怖・楽しさ・悔しい・嬉しい → 感じる  
大人の手伝い → 子どもが自ら感じる

場所の制限はなし

和光保育園 http://www.wakoh-mura.com

図1 「わこう村「和光保育園の子どもたち」視聴のワークシート。動画に集中してほしいのでメモ程度とし、途中でビデオをとめてメモの時間をわたした。

(F.R)「環境だけを提供し、遊びは子供に任せる」という園長先生の考えのもとに行われている保育だと考えるなら、泥だらけになって遊ぶ子供たちの姿は本来の子供の姿なのだと思います。先生方が活動ひとつひとつに願いを持っているからこそ、子供たちもそれに気付き、学んでいくのではないかと思います。活動全てにおいてたくさんの学ぶべき要素が詰まっていると思いました。」

学生は本当に真剣にビデオを視聴していた。そのことは図1の「わこう村「和光保育園の子どもたち」視聴のワークシート」からも明らかである。また、ワークシートでは子ども達が「学んでいる」と実感した場面とその具体的な内容をメモしてもらったが、用紙の裏面にまで書いている学生が多数いた。このワークシートをもとに内容を発表しあったが、大変熱心に語っていた。学生の姿からこの「和光保育園」の取り組みとその映像の力を実感した。講義「保育内容（環境）」にとって要となる動画である。

## (2) 教員になり教育的実践力を身につけることができる講義

学生が教員として現場に立った時、「自然との関わり・生命尊重」についての資質・能力を高めるために具体的にどうするかを積極的に考え、実践する姿を本講義での理想像として捉えた。具体的には職員室で話し合っどうするかを考えている姿を想定している。教師になったときに理論のもとに実践できることが、非常に重要である。講義においては、都会の一見自然の少ないところでも実践可能であることを想定した内容にし、あわせて活動を通しての幼児の学びを常に意識し、活動そのものが目的化しないようにした。また、学びを意識した活動を想定することは、常に本質を考えることになるため、教師としての教育実践についての応用力がつく。

これらを踏まえて講義では、実際にどの幼稚園でも行われていることを想定して3つのプログラムを用意した。それが次の二つである。(ア)「自然の豊かさを味わう」(イ)「園児の視点で自然を観察する」(ウ)「自然の恵みのもとに遊ぶ」そして最後に「幼稚園教育要領」の解釈(エ)「教育要領」をもとに保育を考える。」とした。

### (ア) 自然の豊かさを味わう

北翔大学に隣接して「野幌森林公園」がある。豊かな自然がたっぷりあり、そこを散策した。都会の生活に慣れている学生にとっては、心癒されたり、自然のおもしろさに気がつく時間となった。この自然のよさを実感してこそ、本講義の学びが深まることになると考えられる。なおひとつだけ課題を出した。公園にいて自分がいいな、面白いな、美しいなと思った写真を



図2 野幌森林公園で自然の豊かさを味わう

撮影するようにした。あとでこの写真を鑑賞しあったが、それぞれの視点に共通点や相違点に学生の関心がよせられていた。

### (イ) 園児の視点で自然を観察する

大学内の庭を園庭に見立て、庭に出て、園児ならどのようなことに興味を持つか、子供の視点を予想しながら自然を観察した。保育者自身が、自然に興味を持ち、そこから様々な感性を働かせたり、不思議さや面白さを感じたりすることを活動の一番のねらいとした。その上で、観察した結果を交流し合う中で、同じ環境にいても、一人一人が感じたり、考えたりすることが違うということを実感してほしいと考えた。そのような講義での体験が、実際に保育をするときに、子供一人一人の感じ方や考え方が違うことを前提とし、そのことがよさであるところから保育が可能となる。









			
<p>予想される子供の視点 フワフワしてる 色がきれい 香がのびてる!!</p>	<p>予想される子供の視点 赤い実が 木にちう 少しかたいわ 赤いのは何がある</p>	<p>予想される子供の視点 緑色の葉っぱの間に黄色赤色の葉っぱは なってる。(夢か?) "何かかき音がする。 くしゃくしゃにして寝るにする。</p>	<p>予想される子供の視点 葉っぱと葉っぱの間。 香が陣立のにおいでいい感じしてる。</p>
			
<p>予想される子供の視点 色がオリーブ色か茶色 葉っぱ入ってるから 豆ふかおもしろ 中に入ってる</p>	<p>予想される子供の視点 おもしろい なんでもかきおもしろい 倒れたいまのものが おもしろい</p>	<p>予想される子供の視点 葉っぱのにおいってなにかな? 葉っぱのにおいってなにかな? 元気がないかな? おもしろいかな?</p>	<p>予想される子供の視点 葉っぱのにおいってなにかな? 葉っぱのにおいってなにかな?</p>

図3, 4 「園児の視点で自然を観察する」ためのワークシート

図3, 4は「園児の視点で自然を観察する」ためのワークシートであるが、このワークシートを交流することで、同じ環境にいても、実は一人一人が感じとっていることが違うということを実感する。小学校「理科」でねらいを持って観察する時間とは違うことも理解できるようになる。

### (ウ) 「自然の恵みをもとに遊ぶ」

幼稚園では比較的良好に行われている活動を講義で取り上げた。ただし、幼稚園の実践では、



図6 拾ってきた葉をもとにした造形あそび。本人なりの感性を働かせて、並べている。

自然のよさや面白さを感じ取って実践するのではなく、自然素材を単なる工作の材料としてしまっているような面もあることを踏まえて、落ち葉を拾ってきて、「それで何ができる？」という投げかけを提案した。

拾ってきた落ち葉を幼児のつもりで、並べたり、何かをイメージして並べてみたり、自然の色や形から刺激を受けながら、自分の感性を働かせて遊ぶ。しかし、そのことは、他の人にはわからない。そこで、学生が先生役になり、表現の意図を聞くという活動をおこなった。



図7 児童役が並べた葉っぱについて先生役の学生からインタビューを受ける。全員が両方の役をする



図8 このようなことも「対話的な学び」であることを補足した。

### ■学生のふりかえり

(M.K)「葉っぱにいろんな色や形があって組み合わせることでさらに新たな形が生まれてきて楽しい。大学生が葉っぱで遊んで会話が盛り上がって楽しめるなんて凄い。幼児ならきっともっと楽しいに違いない。」

「先生役をやって～他の人は思いもよらないものを作っていた。しかし、それがなんだか聞かなければわからない。けれど聞いたらすごく面白い。先生として子供に喜びや感動与えるために先生のリアクションも大事なだと実感しました。」

「幼児役をやって～先生に説明するのが楽しいし、わかってくれたり、褒めてくれたりしたらすごく楽しいし、嬉しい。勉強になる。身近にある資源を活用することでこんなに楽しい活動が生まれるとは思っていなかったです。」



学生は実に楽しそうに活動をしていました。また、幼児が喜ぶであろうことが予測できたようである。実際に先生になったときに実践できることをねらっていたことから、確かな手応えのある時間になった。

(エ)「教育要領」をもとに保育を考える。

「教育要領」を読んで、その内容を理解し、目の前の子供達のために、創意工夫しながら実践できる教師になるためにも、大学の講義の中で似た体験をしておくことが大切だと考えた。

具体的には職員室で、今後の保育について、どうすべきかを相談することを想定している。

「教育要領の解説」の11のねらい全てについて、90分で2つ扱うペースで進める。

補足ではなるが、この時間は「対話的で深い学び」の実現をめざした内容にもなっている。

■学生のふりかえり

(D.R)「自分が保育園に通っていたときのことを思い出しながら遊びを考えていたが、教育要領や保育指針に基づいて園内の環境整えているということに気がついた。幼児が発見したり、気付いたりする機会をたくさん作るができるように園内の環境を季節ごとに変化させたり園外に出向いて身近な環境の変化に気づくことが出来るような整備を保育者がすることの大切さを学んだ。」

このように、実際の教育と「教育要領」を実感を持って関連付けることが出来ている。

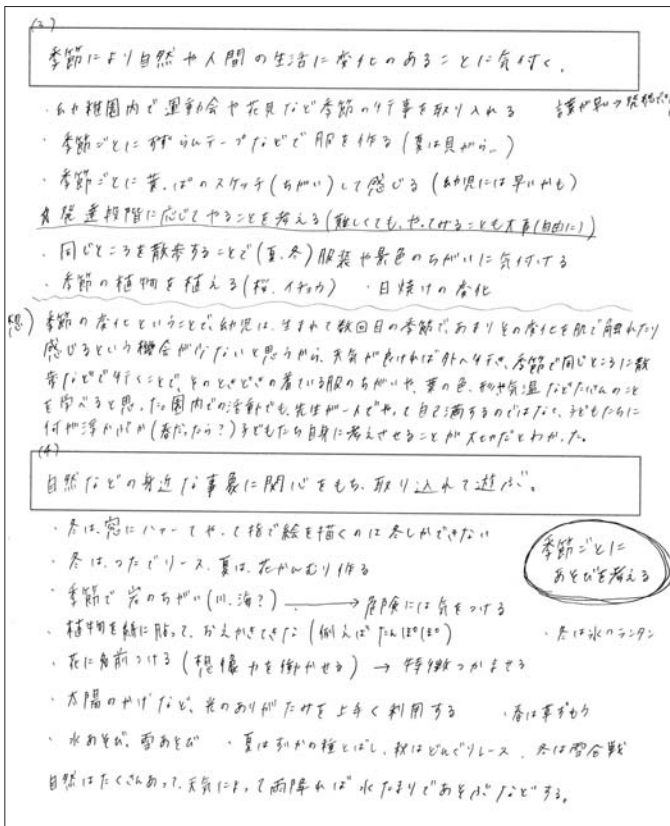


図9 上の段は「(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気づく。」について、グループ協議とそのシェアのあと、自分の考えを最終的にまとめたものである。下の段は(4)自然など身近な自然に関心をもち、取り入れて遊ぶ」について。

## 5 おわりに

本稿では、「保育内容（環境）」における「自然との関わり・生命尊重」に関する講義のあり方について、学生の学びをもとに論じてきた。

さて、今後は、「保育内容（環境）」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連性を踏まえた講義の改善が課題となる。

## 参考文献

- 1, 文部科学省「幼稚園教育要領解説」2008年
- 2, 文部科学省「幼稚園教育要領」2017年
- 3, 厚生労働省「保育所保育指針解説書」2017年
- 4, レイチェル・カーソン「センス・オブ・ワンダー」上遠恵子訳 新潮社 1996年
- 5, 多田満「センス・オブ・ワンダーへのまなざし レイチェル・カーソンの感性」東京大学出版局2014年
- 6, 無藤隆 福元真由美「領域 環境（事例で学ぶ保育内容）」萌文書林 2007年
- 7, 秋田喜代美「保育内容 環境 第2版（新時代の保育双書）」みらい 2009年
- 8, 高内正子「保育実践に生かす保育内容「環境」」保育出版 2015年
- 9, 酒井幸子「保育内容 環境—あなたならどうしますか？」萌文書林 2016年
- 10, 秋田喜代美「保育内容 環境 [第2版]」みらい 2009年
- 11, 無藤隆「幼児教育のデザイン」東京大学出版会 2013年